「放射線治療手帳」
―患者と医療スタッフの情報共有のツールとして―

投稿

加藤　知子*1　Kato Tomoko
武藤　光代*2　Muto Mitsuyo
萬　篤憲*3　Yorozu Atsunori
草間　朋子*4　Kusama Tomoko

1.「放射線治療手帳」作成の経緯

放射線治療を受けた患者の病態等の情報を，患者と医療スタッフが1冊の手帳に記録し，情報共有していくツールとして「放射線治療手帳」を作成した。

がん罹患率が男女共に50％を超え，男性は3人に2人，女性は2人に1人が，がんに罹患している[1)]。放射線治療は，外科療法，化学療法と並んで，がんの3大治療法の1つとされ，患者への侵襲が比較的少なく，「やさしい治療」だとされている。放射線治療は，他の2つのがん療法に比べて患者にとっては馴染みが薄く，具体的な治療過程等をイメージすることが難しいことや「放射線」に対する漠然とした不安等から，患者の理解が乏しいのが現状である。昨今「チーム医療」なしでは医療が成り立たない時代を迎えており，患者も「チーム」の一員として加わり，治療の内容を理解し，治療法の選択・決定等（共同意思決定：Shared Decision Making）も含めて医療スタッフと連携・協同して放射線治療を進めていくことが重要である。そのための手段として「放射線治療手帳」を考えた。

腫瘍部分（ターゲット）に線量を集中させる最新の治療技術が開発されているとはいえ，放射線治療に伴う副作用のリスクを排除することはできない。放射線治療に伴う主な副作用は皮膚障害であり，皮膚の変化や治療に伴う身体的な変化を身近で常に観察できるのは患者であり，更に，皮膚障害の出現を予防し，重症化を防ぐための患者自身のセルフケアも重要である。

そこで，患者が自分の受ける放射線治療の内容を理解でき，放射線治療後の皮膚の変化を含めた身体的な変化や，放射線，放射線治療に関して不安に思っていることを，患者がタイムリーに記録し，その記録をもとに医療スタッフが対応できる手帳を目指すこととした。更に，晩発性の皮膚症状は，数月，数年後に出現する可能性があることや，がんサバイバーが放射線治療を受けた医療機関とは別の医療機関を訪れる場合がある。患者が保持している「放射線治療手帳」に記載した放射線治療に関する記録がそのような場合にも役立つのではないかと考えた。

2.「放射線治療手帳」作成の手順

プロトタイプの「放射線治療手帳」を作成し，A病院の協力を得て，放射線治療を受ける44名の患者，及びその患者の放射線治療に関わった医師（11名），看護師（21名），診療放射線技師（11名）にこの「放射線治療手帳」を使用してもらった。放射線治療が終了した時点で，手帳を使用しての意見等を質問紙により把握し，寄せられた意見等を反映して最終的な「放射線治療手帳」として完成させた。

3.「放射線治療手帳」の概要

最終的な「放射線治療手帳」は，患者が携帯しやすいよう，A5サイズ（210 mm×148 mm），30ページ（表紙含む）とした。「デジタルよりも紙に書き込む手帳方式がよい」という患者及び医療スタッフの意見を反映し，デジタル化の潮流の中ではあるが，紙に書き込む形の手帳とした。「放射線治療手帳」の記載項目・内容（**表1**に示す）について，医療スタッフの約20％（看護師28.6％，診療放射線技師27.3％，医師0.0％）からの意見として，放射線治

表 1 「放射線治療手帳」の内容

	項目	ページ数	記入者
1.	放射線治療手帳の使い方 患者の使い方，医療スタッフの使い方	2	—
2.	これから受ける放射線治療の予定（治療計画） 治療の対象疾患，放射線治療の種類，照射部位，照射日と線量	4	医師 / 診療放射線技師
3.	実施した放射線治療 照射日と線量，総線量	2	医師 / 診療放射線技師
4.	体調の変化や医療スタッフへ相談したいこと 症状のアセスメント，患者への対応	8	患者 看護師 / 医師
5.	日常生活で注意すること	3	—
6.	放射線治療後に現れやすい症状に対するセルフケアのポイント 皮膚症状，口腔粘膜症状，排泄症状	4	—
7.	放射線治療により現れる可能性のある症状（副作用） 急性 / 晩発性	4	—

療に関する内容の中で特に線量に関しては，カルテに記載がある等の理由から「不要である」とされたが，患者の約 60％が役に立った項目として挙げており，患者の意見を反映し残すこととした。その他の項目については「不要」との意見は 10％以下であった。

4.「放射線治療手帳」を使用しての意見

プロトタイプの「放射線治療手帳」を使用した患者の意見としては，「放射線治療について理解しやすかった」（86.4％），「放射線治療後の皮膚の症状などを観る習慣がついた」（75.0％），「自分の様子を記録して残しておきたい」（72.7％）等があり，「放射線治療手帳」の使用により患者は自分の受ける放射線治療を正確に理解することができ，患者自身も積極的に治療に参加していく姿勢が必要であることを認識したことが明らかになった。一方，「書類が増えるだけのように思った」（2.7％），「記録することで気持ちが落ち込んでしまった」（2.7％）との意見もあった。 看護師からは，「患者さんの記録が役に立った」（76.2％），「今後，この手帳を普及していくことが必要と思う」（57.1％），「患者さんが自分の治療に関心を持つことができたと思う」（47.6％），「放射線治療について説明する際に役立った」（47.6％）等の意見が寄せられた。医師からは，「患者さんの記入した記録が役立った」（36.4％），「放射線治療について説明する際に役立った」（27.3％）等の意見が寄せられた。筆者らが，以前に作成した「IVR 手帳」[2] の際には，手帳の利用を通して IVR の過程で「患者に放射線被ばくをしていることを知らせたくない」という危惧を持つ医師がかなり存在し，手帳の普及に至らなかったが，今回作成した「放射線治療手帳」に関しては，「患者さんに，本手帳に記載された内容を知らせる必要はない」と回答した看護師は 9.5％，医師及び診療法放射線技師は 0.0％であった。

5.「放射線治療手帳」の今後の活用法

様々な健康・疾病に関する「手帳」が汎用されているが，患者と医療スタッフの双方が記録する手帳はほとんど見当たらない。「放射線治療手帳」に患者がタイムリーに記載した情報が，医療スタッフは，「役に立った」としており，患者も記録を通して放射線治療に対する関心を高めることができたことが明らかとなり，双方向の情報共有の手段として役立ったと考えている。患者中心の医療を進めていくためには，患者も積極的にチームの一員として参加できる仕組みづくりが必要であり，「放射線治療手帳」が放射線治療においてその手段となることを期待している。また，がんサバイバーとしてこの手帳を患者自身が所持し保管することが将来役立つものと考えている。

今回の「放射線治療手帳」は，外部照射による放射線治療を念頭に入れて作成したものであるが，タイムリーに記載された患者の情報を詳細に分析することにより，副作用に関する情報（副作用の量影響関係や組織反応の正確な潜伏期間）や，患者が抱いている放射線や放射線治療に対する具体的な不安の

内容を把握することができ，今後の放射線治療を進めていく上で必要とされる情報が得られることも期待している。放射線治療は，治療医，主治医，診療放射線技師，医学物理士，がん放射線療法看護認定看護師，外来･病棟の看護師等の様々な職種が連携･協働して，患者の治療前，中，後のフォローをスムーズに行っていくことが極めて重要である。そのためには，患者の放射線治療に関する医療スタッフ間の情報共有が不可欠である。「放射線治療手帳」が，関係する医療スタッフ間の効果的，効率的な情報共有の手段として活用されることを期待している。

謝辞

「放射線治療手帳」の作成にご協力をいただきました患者様及びA病院の医療スタッフの皆様に心から感謝申し上げます。

「放射線治療手帳」の検討グループメンバー：
加藤知子，有阪光恵，池田光子，菊野直子，須田裕子，畑清子，原嶋弥生，三上恵子，武藤光代，萬篤憲，草間朋子

参考文献

1）国立がん研究センター，がん情報サービス https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/summary.html（検索：2023/3/22）
2）有阪光恵，草間朋子，日本放射線看護学会誌，**6**(1)，52-56（2018）

作成した「放射線治療手帳」は，日本放射線看護学会のHP（https://www.rnsj.jp）に掲載されています。「放射線治療手帳」を施設において活用していただく場合や「放射線治療手帳」に対するご意見等がありましたら加藤知子（tomoko.kato@med.toho-u.ac.jp）へご連絡をお願いいたします。

（*1 東邦大学，*2 埼玉医科大学，*3 国立病院機構東京医療センター，*4 東京医療保健大学）